特集7
産地リポート

～JA八戸の産地紹介～ ダイコン新品種「晩々G」を栽培して

八戸農業協同組合
営農部　五戸西部営農センター
主任　小笠原克則

1. 地域の概要について

ＪＡ八戸は平成２１年４月１日に青森県三八地方に拠点を置く４つのＪＡが新設合併して設立された県内最大の農協です。特に長芋・にんにくを中心にした野菜、果物、花きの栽培が多く、他に米、畜産と幅広く生産されています。

その中でも西部五戸営農センター管内（新郷村）は、青森県十和田湖の東側に位置し、西は秋田県との境に接し十和田湖外輪山の一つである戸来岳（大駒ヶ岳、三ッ岳）に面する豊かな自然に恵まれた地域です。

古くは南部藩（南部氏）の軍馬放牧地として利用されており、江戸後期、明治時代に入ると酪農が盛んとなり、青森県内の本格的な酪農発祥地といわれています。

その放牧地跡や国営五戸台地（平成9年完了）を利用し長芋、にんにくの他にも昼夜の温度差がでる夏場の冷良な気候を生かし大根・キャベツ・白菜といった高冷地野菜がたくさん作られるようになりました。

特に、平成8年に完成した大根洗浄施設の利用を機に大根の作付が一気に増え播種時期に合った品種がより求められるようになりました。

2. 大根の品種選定について

当地域は太平洋からの偏西風（ヤマセ）などの影響を受け5月から6月にかけて低温がつづくことがあり度々抽苔の発生があります。又、梅雨の時期とも重なるため病気に強い品種も含め品種の選定は生産者にとって頭を悩ます時期となっています。

そのため旧農協時代からＪＡの指導員と部会組織によって、特に問題が起こる春蒔き大根の品種試験に力を入れ行われて来ました。

新品種は部会の役員レベルでまず試験を行い、良かった品種は引き続き役員の所で再度試験を行う。2年間試験を繰り返し、良かった品種だけを部会員へ奨める方法を取っています。

雪印の品種は前担当時代からも含め品種試験を行い「喜太一、晩抽喜太一、夏蛍、来夏、涼太」など採用されてきた経過があります。平成20年から試験している「晩々Ｇ」（当時ＲＡ-277）は、1年目雨の影響を受け品質はあまり良くなかったのだが、抽苔に強い結果が得られたので平成21年も品種試験の中に入れ試験を行いました。平成21年の試験結果は太りも早く、揃いも良い結果が出たため2月生産販売検討会で部会員へ紹介し平成22年から本格的な栽培に取り組むこととした。

▲ 選果場での筆者

▲ 生育中の「晩々Ｇ」

3.「晩々G」の評価と課題について

今年は、5月下旬が低温で経過し、気象庁から出た3か月予報も低温で推移する見込みとなった事から、より抽苔に強い品種が求められた年でした。実際5月中旬～6月上旬までは「晩々G」など、6月中旬からは「来夏」と抽苔しにくい品種が播種されました。

生育期間中は予想に反して高温・干ばつ傾向で推移し特にマルチ栽培では横シマ症、根が細く太りにくいといった障害が発生しました。

「晩々G」の評価

●5月中旬頃の播種の早い作型では他の産地は抽苔もあったようだが、抽苔も無くまずまず良かったという評価を得られた。

●6月中旬の遅い播種でも抽苔は無かった、他の品種は生育中の高温の影響で横シマ等の障害が出た物もあったが、「晩々G」は揃い・太りも良く割れもなかったので来年度も栽培したいといった声が高かった。

●生産者によって根の先が少し曲がったり、根が潜るために収穫作業の時抜きづらいと言った意見もあるので、当地域に合った栽培方法を考えていきたい。

4. 今後の取り組みについて

大根の生産販売については、ここ数年販売価格の低迷による畑での廃棄処分、天候不順（低温・多雨による抽苔、亀裂褐変症の障害や高温・乾燥による横シマ症、虫害の発生）による出荷の伸び悩み等が続いています。生産者の高齢化も進み大根の産地としての維持も難しくなって来ています。

今後は、単収のアップ・秀品率の向上・経費節減を目標に、抽苔に強く、品質が良く、揃いの良い大根を生産するために雪印の協力を得て品種比較試験を行い、より良い品種を生産者に提供していきたい。

5. むすび

最後にＪＡが合併し豊富な農畜産物を有した総合産地となった最大のスケールメリットを活かし「ＪＡ八戸ブランド」を日本全国に発信していきたい。

▲ ダイコンの選果作業

▲ ダイコンの箱つめ作業